

までのことです。それ以上の関心や抱負があるわけではありません、というよりも、現在の私にとってはそれがいちばんだいじなことだと思われま

す。いま私は、もうひとりの大切な友人である渡辺祐子さん（所員）たちと、12月に横浜校舎で「アジア文化祭」なる催事を準備しています。といっても、たしたことはありません。アジア各国・地域や日本のことを研究したり、授業で教えたりされている先生方に、自由に企画を考え持ち寄っていただくこととして、その集積にそんな名前をつけただけのことです。

きっかけはひとりの留学生の訴えでした。彼は中国（台湾）、韓国を中心とする正規留学生に対する大学の「冷たさ」（彼自身のことばです）をかなしそうに語り、留学生と一般学生の親睦交流公認団体のようなものをつくりたいのだが、手伝ってくれるかと尋ねました。私に異存があるはずもありません。某部署に話をもってゆきましたが、反応ははかばかしくありませんでした。「いろいろとケアしていますから…」。それがじゅうぶんじゃないから彼はかなしい表情をしたのだということばを呑み込んで、私は私が担当する留学生の授業でなにかはじめてみたいと話し、それが端緒となってこの企画が生まれました。

ながい間、日本人にとってのアジアは、柄谷行人氏の響みに倣えば「風景」のようなも

## 「アジア文化祭」のことなど

嶋田彩司

新入所員です。どうぞよろしく願いいたします。

私のことを多少なりともご存じの方は、なぜあの嶋田が所員にと不審に思われるでしょうが、大学での大切な友人のひとりである手塚奈々子さん（主任）に誘われ、すこしでも手塚さんのお手伝いできればと思った

のであったと私は考えます。この場合、風景とはそれを見る者に所有されながら、それを見る者だけを疎外したものの謂いです。単純に、日本人にとってアジアは対岸にあったといってもよいでしょう。もちろん、その疎隔感の背景に日本人がかつてアジアの国々でおこなった忌まわしい行為への引け目のようなものがあることはいうまでもありません。

たしかに、戦後、多くの良識ある日本人は、ある種の反省とともにアジアと向きあってきました。しかし、それは私たち自身がアジアに参入する、あるいはもっと適切な言い方として「還ってゆく」ことの誠実な実践であったかどうか、私には疑問に思われます。つまり私たちはアジアの風景を眺めてはきたけれども、私たち自身がアジアであることの覚悟を忌避してきたように思われるのです。それを私たちのアジアへの「冷たさ」と表現することは、やや牽強附会の説にすぎるでしょうか。

昨今の政権交代によって、東アジア共同体構想なるものが再び注目を集めています。だいぶ前にこのことばを最初に聞いたとき、うさんくさいなと思いました。あの忌むべき行為の記憶と直感的に結びつけてそれを受けとったからでしょう。しかし、いまはすこしちがいます。私たちがアジアに還ってゆく契機としてこれを利用したいと考えています。

とはいえ私は、アジアはひとつなどという主張に与しません。むしろアジアは多様で複雑です。そして私たちの日本もまた、海を隔てたアジアの国々の影響を多元的かつ多層的に受けながらいまに至っています。私たちはもういちど自身のアジアを発見し、異物としてたくさんのアジアを受け容れるトレーニングをすべきだと考えます。

ことし、「アジア文化祭」の試みはうまくいかないかもしれません。しかし、それでもあきらめず数年は続けたいと思っています。そして、だんだん学生の自主運営に移行してゆくことができればよいとも思います。留学生たちには、大学がなにもしてくれないとかなしそうな顔をしているだけではだめだということをお伝えしたいと思います。

この12月に間に合うことではありませんが、キリスト教研究所にもいずれキリ研ならではの切り口で参加していただければと思っています。そういえば、キリ研の活動は、この「アンゲロス」などの媒体を通してしか横浜校舎に伝わってきません。せっかく「明治学院研究」という恰好の場所があるのですから、どうか横浜にもキリ研の声を届けてください。そうすればついこの間までの私とおなじように、遠くから眺めているだけのキリ研に近づいてくれる仲間が増えるかもしれません。

(しまだ・さいし 所員、本学教養教育センター教授)